

乳児への絵本の読み聞かせについての信念に関する研究

—公共図書館の養育者向けガイド文書の日米比較—

村瀬俊樹

Beliefs on reading picture books for babies and toddlers:
Comparative analysis of contents of guides for caregivers
by librarians between Japan and the U.S.

Murase Toshiki

キーワード：読み聞かせ、信念、発達のニッチ、日米比較

心理学では、これまで、北米での研究の知見に基づいて人の心のあり方について議論されることが多かったが、近年、欧米の人とは多少なりとも異なる東アジアの人の心の働きが注目され始めてきた。東アジアの一部である日本人々についても、欧米の人々と比較して、自己高揚の傾向が弱く自己卑下の向上心の傾向が強い、行動から特性の推論をする傾向が弱い、気持ちを重視する、擬人的思考の傾向があるなどの特徴が指摘されている（たとえば東，1994；北山，1998）。これらの研究では、欧米の人々と東アジアの人々の心の働きを比較するが、その違いを記述するばかりでなく、それぞれの心の働きを、それぞれの集団が歴史的に蓄積してきた社会・文化的プロセスの一部として理解しようとする文化心理学へと発展している（北山，1997）。文化心理学の立場からは、ある集団においてある心理過程が形成されていく仕組みを明らかにすることが課題の一つとなるが、この点については、現在でも十分に明らかにされているとはいえない。

子どもがある文化において成長し、ある心理過程を形成していくとき、子どもを取り巻く文化的環境がどのようなものであるかということが問題となる。このことについて、Super & Harkness (1986) は、発達のニッチという考えによって議論を展開している。発達のニッチとは、子どもがその中で社会化されていく文化的環境のことであり、物理社会的文脈、子どもを取り巻く慣習、養育者の信念という3つの構成要素が含まれる。養育者の信念とは、子育てや、子どもの発達、子どもを取り巻く環境について、養育者が抱いている考えのことである。日本の子どもたちにとっての発達のニッチは、欧米の子どもたちにとっての発達のニッチとどのような共通点があり、どのような相違点があるのだろうか。本研究は、発達のニッチの1つとして絵本を取り上げ、日本とアメリカにおける発達のニッチとしての絵本についての信念を明らかにすることを目的とする。

発達のニッチとしての絵本に関して、子どもを取り巻く慣習という観点からは、絵本が

子どもに対してどのように読まれるのかということが問題とされてきた。日米それぞれで絵本場面における母親の発話を分析した研究は、絵本場面の会話におけるフォーマットが共通に見られることを明らかにしている (DeLoache & DeMendoza, 1987; 石崎, 1996; 村瀬・マユ・小椋・山下・Dale, 1998; 外山, 1989)。また、絵本場面の母子会話を日米間で直接的に比較した研究は、子どもがラベリングをする文脈に日米間で違いが見られることを明らかにしている (Murase, Dale, Ogura, Yamashita, & Mahieu, 1999)。

一方、養育者の信念という観点からは、養育者が絵本をどのように読むのがよいと考えているか、絵本は何のために読むと考えているか、絵本を読むことで何が得られると考えているかといったことが問題となる。秋田・無藤 (1996) は、日本の母親が、幼児への絵本の読み聞かせについてどのように考えているか調査し、空想したり親子のふれあいをするという意義と、文字を覚え文章を読む力や生活に必要な知識を身につけるという意義の二因子を抽出している。そして、割合の上では、空想したり親子のふれあいをするという意義を重視する母親が多いが、文字を覚え文章を読む力や生活に必要な知識を身につけるという意義を重視している母親も一定数いることを明らかにしている。

ところで、かつて、絵本は幼児期以降の子どもを対象としたものと考えられていたが、3歳未満の子どもの認知能力が明らかになるにつれ、3歳未満の子どもの想定した絵本も数多く出版されるようになってきた。日本でも、近年、ブックスタートを行う自治体が増えてきている。ブックスタートとは、赤ちゃんと保護者が絵本を介して向き合い、あたたかくて楽しいことばのひとつを持つことを

応援する運動で、地域に生まれたすべての赤ちゃんと保護者を対象とし、乳児健診の場で保護者に絵本や読み聞かせに関するガイドなどが入ったバックを手渡し、絵本や絵本の読み聞かせについて説明を行うという形で行われている。ブックスタートは、イギリスのバーミンガムで1992年に試験実施がなされ、本を楽しむようになることへの効果や子どもの言語・認知面への効果が指摘されており、その影響を受けて、日本でも取り組まれるようになったものである (秋田, 2004; 佐藤, 2002)。ブックスタート以外にも、公立図書館や出版社・書店で0歳児用のブックリストを作成したり、ストーリータイムを実施したりするなど、3歳未満の子どもの絵本を読み聞かせることを薦める取り組みがなされている。

アメリカでも、多くの公立図書館で、3歳未満の子どものためのブックリストを作成したり、0歳児から絵本になじむことを薦めるリーフレットを出したり、0歳児から参加できるようなストーリータイムを実施したりなど、0歳児から絵本になじむような取り組みがなされている。また、絵本や説明書、人形などを1つのバックとしたキットを貸し出している図書館もある。このように、日米両国で、0歳児から、絵本は身近な存在となっている。

本研究では、子どもを取り巻く大人の信念という観点から、0歳から2歳代の子どもの養育者に対して図書館が提供している文書において、どのように絵本や絵本の読み聞かせが薦められているのかを分析することとする。秋田・無藤 (1996) では、幼児期の子どもを持つ母親の信念が検討されているが、乳児にとっての絵本についての信念を調べている研究は見当たらない。日常的に直接子どもに接触する時間が長い養育者の信念を調べるこ

はもちろん重要であるが、養育者の信念に影響を与えると考えられる専門機関の信念を調べることも重要であると考えられる。絵本に関する専門機関や専門職としては、図書館以外に、研究者や赤ちゃん絵本の出版社、赤ちゃん絵本の専門書店、その他子どもの読書に関心をもつ様々な立場の機関や人がいる。本研究で図書館が提供している文書をもとに専門機関の信念を調べることとしたのは、公共図書館が日本全土、アメリカ全土にわたって所在しており、特定の地域に偏らず、各地域で子どもや育児者と接触する専門機関であること、日本でもアメリカでも図書館が提供している養育者に絵本を薦める文書が一定数以上手に入ると考えられるからである。

方法

分析対象

日本およびアメリカそれぞれにおいて、公立図書館のウェブページ上に載せられている文書で、0歳から2歳代の子どもの養育者に対して、絵本の読み聞かせを薦めていると考えられるもの、また、公共図書館が発行しているリーフレットにおいて、0歳から2歳代の子どもの養育者に対して絵本の読み聞かせを薦めていると考えられる文書を分析の対象とした。

日本のウェブページに載せられていた文書は、野辺地町立図書館（青森県）、市川市立図書館（千葉県）、板橋区立図書館（東京都）、一宮市立豊島図書館（愛知県）、大阪府立図書館、大阪府立国際児童文化館、神戸市立図書館（兵庫県）の文書であり、図書館が発行しているリーフレットは、浜松市立図書館（静岡県）が発行している「あかちゃんといっしょー0歳からのえほんとわらべうたー」

（2001年）である。以上合計8つの公共図書館の文書をデータとした。

アメリカのウェブページに載せられていた文書は、Seattle Public Library（ワシントン州）、San Jose Public Library System（カリフォルニア州）、Saint Paul Public Library（ミネソタ州）、Milwaukee Public Library（ウィスコンシン州）の文書であり、図書館が発行しているリーフレットは、King County Library System, Pierce Public Library（以上、ワシントン州）、Multnomah County Library（オレゴン州）のものである。以上合計7つの公共図書館の文書をデータとした。

分析カテゴリー

日米の図書館で提供されている文書を検討した結果、書かれている内容は、主に、1). どのような絵本を選ぶべきか、2). どのように読み聞かせをするべきか、3). 絵本の読み聞かせがもたらすもの、であることがわかった。

どのような絵本を選ぶべきかに関しては、a). 明るい色ではっきりと描かれているもの、b). 暖かみのある絵が描かれているもの、c). リズミカルなことばやライムがテキストに書かれているもの、d). 子どもにとって身近な内容が描かれているもの、を挙げている図書館が多かったため、これらの内容が文書に書かれているかどうかを分析した。

どのように読み聞かせをするべきかに関しては、e). 養育者が描かれている対象を指差す、f). 養育者が描かれている対象の名を言う、g). 養育者が声の調子を変える、h). 養育者がリズミカルなことばで読む、i). 養育者が素直な声の調子で読む、j). 養育者がゆっくりと読む、k). 子どもに身振り・喃語・ページめくりなどで参加させる、l). 子どもの行

動に養育者が反応する, m). 何度も繰り返して読む, n). 養育者と子どもが楽しく, 幸せな時間を過ごす, o). 養育者が歌を歌ったり人形を使ったりして絵本読みをアニメートする, を挙げている図書館が多かったため, これらの内容が文書に書かれているかどうかを分析した。

絵本の読み聞かせがもたらすものについては, p). ことばの発達との関連性, q). 読み書き能力との関連性, r). 認知能力との関連性 (学業成績や想像性など), s). 養育者と子の情愛的関係を築いたり感じたりできること, を挙げている図書館が多かったため, これらの内容が文書に書かれているかどうかを分析した。

分析方法

図書館が養育者向けに提供している文書には, どのような絵本を選ぶべきか, どのように読み聞かせをするべきか, 絵本の読み聞かせがもたらすものすべてが書かれているわけではない。そこで, この3つの内容について別々に分析対象を決定することとした。すなわち, どのような絵本を選ぶべきかについては, それについて何らかの記述をしている図書館の文書のみを分析対象とし, そのような内容がまったく書かれていない図書館の文書は欠損値として扱い, その分析からは除外した。どのように読み聞かせをするべきか, 絵本の読み聞かせがもたらすものについても同様に分析を行った。その結果, どのような絵本を選ぶべきかについては, 日本8, アメリカ7の図書館の文書が, どのように読み聞かせをするべきかについては, 日本7, アメリカ7の図書館の文書が, 絵本の読み聞かせがもたらすものについては, 日本7, アメリカ6の図書館の文書が分析対象となった。

それぞれの図書館の文書について, 先にあげた a). ~ s). の内容が書かれているかどうかを評定した。

結果

本研究のデータは, 事例数が少なく, 各事例も, 同じ書物など, 共通のソースをもとに書かれている可能性も否定できないので, 結果は事例数とその割合を読み取ることにとどめることとする。

どのような絵本を選ぶべきか

どのような絵本を選ぶべきかについての記述が見られた図書館の文書のうちで, 各分析カテゴリーの記述が見られたかどうかを日米それぞれにまとめたものが表1である。

日米ともに, 明るい色ではっきりと描かれた絵の本を選ぶよう薦めている図書館が多いが, 日本では, それに加えて, 暖かみのある絵を描いた本を薦める図書館が数は少ないがある。また, 日米ともに, リズミカルなことばやライムがテキストに書かれている本や, 子どもにとって身近な内容を描いた本を薦めており, これらについては日米間に大きな差はない。

読み聞かせをどのようにするべきか

読み聞かせをどのようにするべきかについての記述が見られた図書館の文書のうちで, 各分析カテゴリーの記述が見られたかどうかを日米それぞれにまとめたものが表2である。

アメリカでは, 養育者が絵本に描かれている対象を指差したり, その名前を言うことを薦めている図書館があるが, 日本ではそのような図書館は見られない。また, アメリカでは養育者が歌を歌ったり人形を使うなどして,

表1. どのような絵本を選ぶべきかについて、各項目を記述している図書館文書の数（割合）

	日 本		ア メ リ カ	
	記述あり	記述なし	記述あり	記述なし
明るい色ではっきりと描かれた本	5 (62.5%)	3 (37.5%)	7 (100%)	0 (0%)
暖かな絵が描かれた本	2 (25.0%)	6 (75.0%)	0 (0%)	7 (100%)
リズムカルなことばやライムが書かれている本	6 (75.0%)	2 (25.0%)	4 (57.1%)	3 (42.9%)
子どもにとって身近な内容が描かれている本	3 (37.5%)	5 (62.5%)	3 (42.9%)	4 (57.1%)

表2. 読み聞かせをどのようにするべきかについて、各項目を記述している
図書館文書の数（割合）

	日 本		ア メ リ カ	
	記述あり	記述なし	記述あり	記述なし
養育者が描かれている対象を指差す	0 (0%)	7 (100%)	5 (71.4%)	2 (28.6%)
養育者が描かれている対象の名を言う	0 (0%)	7 (100%)	3 (42.9%)	4 (57.1%)
養育者が声の調子を変える	0 (0%)	7 (100%)	4 (57.1%)	3 (42.9%)
養育者がリズムカルなことばで読む	1 (14.3%)	6 (85.7%)	4 (57.1%)	3 (42.9%)
養育者が素直な声の調子で読む	2 (28.6%)	5 (71.4%)	0 (0%)	7 (100%)
養育者がゆっくりと読む	2 (28.6%)	5 (71.4%)	0 (0%)	7 (100%)
子どもに参加させる	0 (0%)	7 (100%)	3 (42.9%)	4 (57.1%)
子どもの行動に養育者が反応する	0 (0%)	7 (100%)	2 (28.6%)	5 (71.4%)
繰り返し読む	2 (28.6%)	5 (71.4%)	5 (71.4%)	2 (28.6%)
養育者と子どもが楽しく幸せな時間を過ごす	5 (71.4%)	2 (28.6%)	2 (28.6%)	5 (71.4%)
養育者が読み聞かせをアニメートする	0 (0%)	7 (100%)	3 (42.9%)	4 (57.1%)

読み聞かせをアニメートすることや、子どもに身振り・喃語・ページめくりなどで絵本読みに参加することを促すことを薦めている図書館があるが、日本ではそのような図書館は

見られない。日本では、アメリカよりも読み聞かせをすることで、楽しく幸せな時間を養育者と子どもが過ごすことを薦める図書館の割合が多い。

表3. 絵本の読み聞かせでもたらされるものについて、各項目を記述している
図書館文書の数（割合）

	日 本		ア メ リ カ	
	記述あり	記述なし	記述あり	記述なし
ことばの発達との関連性	3 (42.9%)	4 (57.1%)	1 (16.7%)	5 (83.3%)
読み書き能力との関連性	1 (14.3%)	6 (85.7%)	4 (66.7%)	2 (33.3%)
認知能力との関連性	2 (28.6%)	5 (71.4%)	2 (33.3%)	4 (66.7%)
養育者と子の情愛的関係	7 (100%)	0 (0%)	1 (16.7%)	5 (83.3%)

声の調子に関しても、アメリカでは、養育者が声の調子を変えたり、リズムカルに読むことを薦めている図書館が見られるが、日本では、養育者が素直な声の調子でゆっくりと読むことを薦めている図書館が見られる。ことばのリズムを重視することは、日本でもリズムカルなことばが書かれた本を選ぶことが薦められているので、読み聞かせをどのようにすべきかの結果で見られるほど、日米間で大きな差異はないのかもしれない。

絵本の読み聞かせでもたらされるもの

絵本の読み聞かせでもたらされるものについての記述が見られた図書館の文書のうちで、各分析カテゴリーの記述が見られたかどうかを日米それぞれにまとめたものが表3である。

アメリカの方が日本よりも読み書き能力との関連性を述べている図書館が多い。一方、日本のすべての図書館で養育者と子との情愛的関係を築いたり感じたりできることが挙げられているが、アメリカの図書館でそのことについて述べているのは1館のみであった。

考 察

本研究の結果、どのような絵本を選ぶべきかという点に関しては、暖かみのある絵のものを薦めることが日本の図書館で見られた以外、日米間に大きな差異は見られなかった。

しかしながら、読み聞かせをどのようにすべきかや、絵本の読み聞かせがもたらすものについては、日米間に差が見られた。アメリカの方が日本より、子どもに対して絵本読みに積極的に参加させることや、養育者自身が声の調子を変えたり、絵本読みをアニメートするなど、絵本読みを劇化することを薦める傾向が強く、養育者が絵本の絵を指差してその名前を言うなど対象を分析的に示し言語化することを薦める傾向も強い。一方、日本の方がアメリカよりも、普段通りの普通の話しかけでゆっくりと読むことでよいことや、絵本の読み聞かせで楽しく幸せな時間を持つといった子どもとの情愛的関係を重視した読み方を薦めている傾向が強い。

絵本の読み聞かせによってもたらされるものについての信念の結果は、読み聞かせをどのようにすべきかについての信念の結果と一致している。日本の図書館では、読み聞か

せによって養育者と子どもとの間で情愛の絆を感じる事ができ築くことができる事が強調されているのに対して、アメリカでは読み書き能力との関連性を述べる図書館が日本よりも多かった。

以上の結果は、これまで母親の発話について見出されてきた、日本の母親の方がアメリカの母親よりも情緒志向的な発話を多くし、アメリカの母親の方が日本の母親よりも情報志向的な発話を多くするという日米間の差異 (Fernald & Morikawa, 1993) と一致している。このことは、子どもを取り巻く慣習的な発達のニッチとしての母親の発話と、絵本の読み聞かせに関して専門機関の示す信念との間に、日米間の差異に関して一貫性があることを示している。一方、アメリカの方が読み聞かせを劇化することを薦める傾向があることについては、これまで実際の母親の発話での違いとしては確認されていない。この点については、今後、実際の母親の発話を検討する必要がある。

図書館が養育者に対して提供するメッセージは、図書館員の個人的信念をそのまま伝えていたとは限らない。図書館という社会的役割から、養育者の現状に対してメッセージを送っている可能性がある。日本とアメリカで識字率や多言語社会である度合い、子育ての状況が異なるために本研究で見られた違いが得られた可能性もある。今後、専門職者個人の信念や養育者の信念を検討することによって、子どもを取り巻く人たちの絵本の読み聞かせに対する信念の構造が明らかになると思われる。

引用文献

秋田喜代美 2004. 子どもの発達と本：市

民による読書ネットワークが支える対話的読書環境. 発達, No. 99, 2-7.

秋田喜代美・無藤隆 1996. 幼児への読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動の検討. 教育心理学研究, 44, 109-120.

東洋 1994. 日本人のしつけと教育：発達の日米比較にもとづいて. 東京大学出版会.

DeLoache, J. S., & DeMendoza, O. A. P. 1987. Joint picturebook interactions of mothers and 1-year-old children. *British Journal of Developmental Psychology*, 5, 111-123.

Fernald, A. & Morikawa, H. 1993. Common themes and cultural variations in Japanese and American mothers' speech to infants. *Child Development*, 64, 637-656.

石崎理恵 1996. 絵本場面における母親と子どもの対話分析：フォーマットの獲得と個人差. 発達心理学研究, 7, 1-11.

北山忍 1997. 文化心理学とは何か. 柏木恵子・北山忍・東洋 (編) 文化心理学：理論と実証. P.17-43 東京大学出版会.

北山忍 1998. 自己と感情：文化心理学による問いかけ. 共立出版.

Murase, T., Dale, P. S., Ogura, T., Yamashita, Y., & Mahieu, A. 1999. Mother-child conversation in joint picture book reading situation: Comparative study between Japan and U.S.A. Poster presented at VIIIth International Congress for the Study of Child Language at San Sebastian, Spain.

村瀬俊樹・マユールあき・小椋たみ子・山下由紀恵・Dale, Philip S. 1998. 絵本場面における母子会話：ラベリングに関する発話連鎖の分析. 発達心理学研究, 9, 142-154.

佐藤いづみ 2002. ブックスタート：本と

のひとときあかちゃんと一緒に. 横山真佐子・三輪哲・福田洋子・村中李衣・市河紀子(編) 別冊太陽 人生ではじめて出会う絵本100:あかちゃんのための50冊おとなのための50冊. P.136-141 平凡社.

Super, C. M. & Harkness, S. 1986. The developmental niche: A conceptualization at the interface of child and culture. *International Journal of Behavioral Development*, 9, 545-569.

外山紀子 1989. 絵本場面における母親の発話. 教育心理学研究, 37, 151-157.

謝 辞

資料収集に際して、浜松市立図書館、King County Library System, Multnomah County Libraryの職員の方々にお世話になりました。記して感謝します。